

# 集団にスムーズに入れる子

— 情緒の安定を目指して —

松 本 享 典

## 1. 対象児のプロフィール

(1) 生徒名 M・H (男) 高等部3年生(18才) 自閉症

(2) 生育歴

- ・昭和43年9月6日生
- ・3才…T児童相談所にて「自閉症児ではないか」と診断される。
- ・4才…K大にて「自閉的傾向あり」と診断される。
- ・I幼稚園(3ケ年)を卒園後、W学園(6ヶ月)、H小学校(2年3ヶ月)、N小学校(3年3ヶ月)を経て、N中学校に入学する。
- ・N小学校では情緒障害児学級に在籍し、かなり厳しい指導を受ける。
- ・N中学校(3ケ年)を卒業後、本校高等部に入学する。
- ・高等部では、1年→2年→3年と同一メンバーで学級が構成されている。

(3) 本児の実態

### ① 観察からの実態

身近な身の事柄(食事、被服の着脱等)ができ、文字・数字の読み書きは小学校1、2年程度の事が可能である。しかし、集団への適応力に弱く、集団からの離脱やその他の場にそぐわない言動をとることが多い。また、会話はオウム返しが多いものの日常のあいさつは目を合わせればでき、自分の要求したいことは「～しますか」といった言い方で伝えることがある。

### ② 諸検査からの実態

- ・WISC-R (S56.5.26実施)……測定不能
- ・CLAC-II (S61.2.20実施)……(図①)
- ・CLAC-II (S61.4.22実施)……(図②)

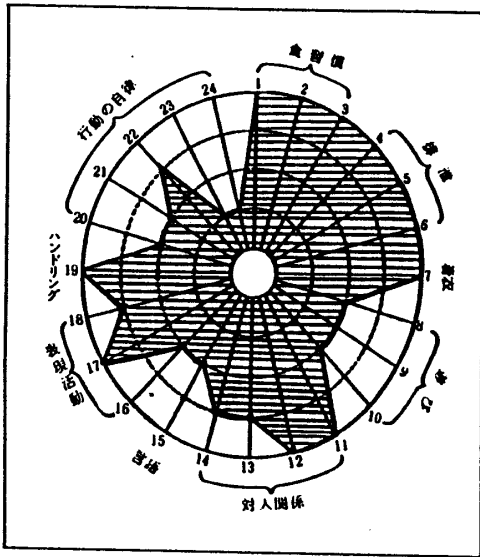
### ③ テーマにかかわる実態

②の検査からも分かるように、本年4月当初に“食習慣”“排泄”“ハンドリング”を除いた他の面の落ち込みが現れた。この傾向は2年時の3学期後半より目立っていたが、本年度になってからは、以前にも増して落ち着きがなかったり、むやみに独り言を言うようになってきた。多動傾向も顕著に現れ、情緒不安定の日が続き始めた。(2年進級時には、このような実態はなかった。)

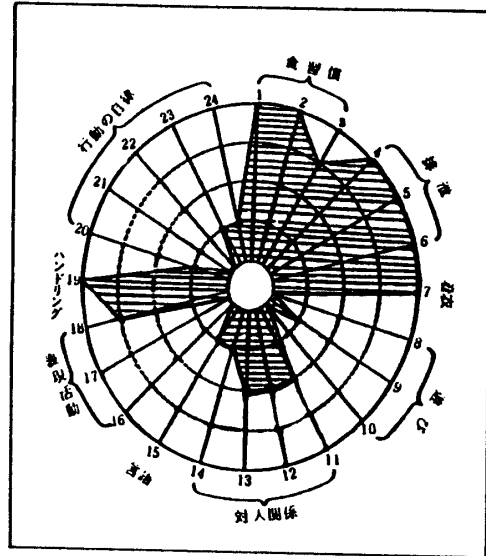
## 2. 個人目標の設定

4月に行ったCLAC-IIの検査結果(図②)と家庭での生活状態(学校と同じく落ち着きがなくなっていた)から、精神科医の診断を受けたところ、「確かに情緒が不安定になっている。なぜ突然こうなったかは分からないが、決して強制的な態度で接してはいけない。本人が嫌がることは無理に

(図 ①)



(図 ②)



させてはいけない」との指導を受けた。

そこで、本児の個人目標を設定するにあたり、情緒の安定を最重視していかなければならないと考えた。また、たとえ一対一であろうと一対多であろうと本児を含めた集団で、学校生活・家庭生活・社会生活を送っていかなければならない以上、集団というものも無視してはならないと考え、本児の個人目標を

『集団にスムーズに入れる子 — 情緒の安定を目指して —』

と設定した。

### 3. 研究の方法

- (1) コミュニケーションを今まで以上に密にする。
- (2) 許容的態度で接する。
- (3) 生徒同士の関係を温和なものにする。
- (4) 本児の興味・関心を知り、それに合った活動を取り入れる。
- (5) 母親との信頼関係を保つとともに、生活ノートや家庭訪問等で、教師・家庭・医師の指導の一貫性を図る。

以上のことに留意しながら研究を進めていくことにした。それに伴い、私自身も気持ちを安定させて取り組むことが大切だと考えた。指導する者に「何とかしなければ」「早くさせなければ」などのような、あせりや気負いがあれば、必ず言葉や態度に現れ、指導を受ける者にとって決してプラスにはならないからである。本児が情緒を安定させて集団に入れるようになるためにも、あせらず、その都度最も適した手だてを追求していくことで、本児の個人目標にせまりたいと考えた。

### 4. 指導実践例

- (1) 日常生活指導を通して

- ① 掃除の時間

<実態>

- ・雑巾で机をふくことはできる。
- ・ほうきやりとりを使うことが苦手である。(ごみをとるということが理解されていない。)
- ・自分の机は自分で運び出すが、その後は教室からとび出してしまう。

<手だて>

- ・自分の机以外の物(教卓・オルガン・欠席生の机等)を教師といっしょに運ぶようにする。
- ・机や棚の上を雑巾や台ふきでふく仕事を専門にさせ、ほうきを使った掃き掃除はさせない。
- ・廊下や特別教室の掃除はさせず、教室のみに当てさせる。

<変容>

- ・掃除の時間中、教室からとび出す回数が減ってきた。
- ・何をしようのかが分からずウロウロしているということが減り、私の目を見て次の指示を待つという行動が表れた。

② 給食の時間

<実態>

- ・教室に置いてある箸をランチルームに持っていくことを忘れ、「いただきます」を言った後、そのことに気づくと、どうしていいかわからず、何も食べようとしない。食べたいが、どうしたらよいか分かっていない。

<手だて>

- ・しばらくは何も言わず、教師の箸を意図的に見せながら食べてみせる。
- ・他の生徒にも、本児が口にすると何も言わせない。
- ・待っても何も言わない時には「何がないの」「ない時はどうすればいいの」という問いかけをする。
- ・「箸がありません」「箸を貸して下さい」と答えたら、予備の箸を持たせる。

<変容>

- ・指導を始めて2ヶ月後(6月上旬)に、初めて自分から「箸がないです」と言えた。
- ・11月上旬、「箸がないです」と言った後「どうすればいいの」の問いかけに、「取って来て下さい」と答える。
- ・徐々に箸を忘れる回数は少なくなってきたものの、忘れた時に自分から「箸がないです」と言うことはなく、以前と同様何をしようのかわからない様子で何も食べようとしない。

(2) 作業学習を通して

① 木工にて

<実態>

- ・ペーパー磨きを中心に作業をしている時、すぐに手をとめて席を立とうとする。時折、床に寝

そべろうとする。

- ・作業にあきたり根気が続かなくなったりしたら、トイレに逃げ込んだり教室の外へとび出したりする。

<手だて>

- ・手をとめた時には「やりなさい」と指示するが、やさしく声かけをする。
- ・床に寝そべった時には、少し厳しく「やめなさい」と言い、起きるように促がす。
- ・トイレに逃げ込んだり教室から出た時には、無理に着れもどさず、しばらく様子を見る。
- ・時間が長い時には、呼びに行く。

<変容>

- ・声かけをしなくても、視線が合うだけで作業を続けられるようになった。
- ・席から離れても、しばらくすると席にもどり、作業を続けられるようになった。
- ・本児はむしろ、私の声かけを待っている様子であり、声かけをせず、素知らぬ素振りをとっていると、再び作業を始めることが増えた。

② 農園にて

<実態>

- ・農園作業全般を嫌がるが、特に草とりを嫌がり、場をすぐに離れる。
- ・ジョロでの水やり作業は根気よくできた。

- ・短時間は作業をさせるが、その後は自由にさせる。

<変容>

- ・農園の時間での変容は認められない。現在も農園の時間には場を離れる。だいたいは、ブランコに乗って遊んでいる。

(嫌がる農園作業を無理にさせないようにした。このことが、本児の気持ちを楽にし、他の面)における変容にも影響していると思われる。

(3) 生活一般の一例 (題材名「農園職業実習の反省」)

学習活動(本児以外の生徒)	本児の学習活動	本児の様子
1. 本時の学習内容を知る。	1. 本時の学習内容を知る。	1. 席につき私の話を聞いているが、視線は合っていない。
2. 実習中のビデオを見る。	2. 実習中のビデオを見る。	2. あまり興味を示さない。視線もあちこちにいつている。
3. 具体項目ごとに○×△で自己評価をする。	3. 先生といっしょに友だちの評価(○×△)マークを一覧表に貼りつける。	3. 教師の指示のもと、教師といっしょにマークを貼りつけることができた。始めは、やり方が分かりにくそうであったが、徐々に手慣れた感じで、進めていくことができた。

4. 先生の評価を見て自己評価との違いを知る。	4. 一覧表の先生の評価の欄の紙をはがす。	4. 3の活動の様子と比べると、少し落ち着きがなくなってきた。マークを貼る、紙をはがすという活動にあきてきたようである。しかし、最後まで指示に従いながら、教師の手伝いができた。
5. 今後の目標を知る。	5. 今後の目標を聞く。	5. 教師の問いかけに対して、「はい」と一応は返事をした。

## 5. 考察と反省

情緒の安定を目指し、本児にとって学校生活が苦痛にならぬような手だてを加えながら指導をくり返してきた。特に、本児とのコミュニケーションを大切に、休けい時等には、行動を共にしたりいっしょにブランコに乗ったりした。本児にとって私は信頼できる相手であり、自分の要求を分かってくれる相手である、といった関係を作ってきたつもりである。

実践を重ねて6ヶ月たった10月27日、再びCLAC-IIによる実態調査をした。その結果は右図(図③)で示した通りである。

4月に実施したCLAC-IIの結果と比べると、対人関係、表現活動などが昨年度の実態に近づいてきたことが分かる。実際、集団への適応力も少しずつ身につけてきているようである。

このことは、私のとった手だてが全て効を奏した結果だとはいえない。なぜなら、本児は4月に精神科医に診断してもらってから、安定剤を服用している。こちらのほうの影響が大きいに違いない。しかし、医師の診断を受け学校と家庭が同一步調に進んだことも現在の変容につながっていると思う。本児の不適応行動を認め適度に指示を与えながら、時には自由に振る舞え、時には甘えられる人間関係や集団、環境が大切であると改めて感じた。

## 6. 今後の課題

本児対教師の関係は望ましいものになってきたが、本児対他生徒の関係が望ましいものになっていない。私が本児といつも接するようになってきたため、他生徒と本児のかかわりが少なくなっている。これでは、いくら学級内で情緒が安定しているからといって、真の集団にスムーズに入れる子とは言えない。今後は、生徒同士のかかわりにも重点を置いて、集団への適応力を身につけさせていきたいと考える。

(図 ③)

